日本で大乗仏教を見直す

バンジョブ・バナルジ博士

（タイ・チュラロンコン大学教授）

横浜・善光寺（黒田武志住職）の招請により、訪日したタイのチュラコロンコン大学教授バンジョブ・バナルジ博士は、将来同大学の学長候補に目されている前途有望な学者である。

博士は一九五三年の生まれ。タイ国人の習わしとして、子供のころより仏道に入り、上座部仏教の教えに帰依している。十歳でシャミ、二十歳で得度し、二十八歳まで僧侶生活をした。その間、マハチュラ・ブッディスト大学（仏教大学）を卒業し、チュラロンコン大学大学院修了、インドのマガダ大学で仏教哲学を専攻し、博士号を修得。現在はチュラロンコン大学で仏教学を教えている。一九九五年、アメリカでのブッディスト・カンファランス、二〇〇二年、WFB（世界仏教徒会議）マレーシア大会などの国際会議に出席し、著書は二十六冊に及ぶ。

バナルジ博士は十八年前、立正佼成会に招請されて訪日し、昨年は黒田武志師のタイでの講演などに触れて大乗仏教を再認識、大乗仏教を見直そうとしている。「上座部仏教の国々に比べて、大乗仏教国の発展ぶりをまざまざと見せつけられるにつけ、その背後に大乗仏教があるのではないかと思うようになった」と、大乗仏教を研究する動機を述懐する。黒田師は、大乗仏教の長所を学んでもらおうと博士の訪日を実現させた。

「日本に来た直接の契機は、昨年タイの私の大学で行った黒田老師の講演で、はじめて大乗仏教の講演を聞いて大変感動した学長に、日本で大乗仏教を学んできたらどうか、と勧められたからです。今回は、曹洞宗の修行道場、大学、寺院、宗務庁など曹洞宗の施設を中心に訪問しました」

日本について、「日本はタイが持っていない知恵を持っている。小さい国だが、大きいことができる国だと思った。それは大乗仏教から来ているのではないか」と感想を述べ、「タイでは、大乗仏教が今後の世界にも期待できる仏教の姿ではないか、という意見が出てくるようになっている」と語った。

上座部仏教徒大乗仏教との違いについては、「五十年前、クリスマス・サンフリーという英国の仏教学者が、大乗仏教と上座部仏教を比較したときに、大乗仏教の国の方が金持ちだと指摘していた。その時点で納得もしていた。その理由は、上座部仏教では、仏教家の視点から見ていて、発展を経済面で考えない。宗教面での発展とか大事にしている。経済発展とはつながりにくい面がある。だが、大乗仏教は、仏教と違う形で経済発展と一緒になっていると感じている」と言う。

また「スリランカやタイでは天然資源が豊か

なので、外に向かって発展する気持ちが弱い。日本は資源が乏しいため、外へ向けて発展しようとしたのが、経済発展につながったのではないか。また、日本が戦争に負けたことも経済発展につながった」とも。

「上座部仏教は、個人の悟りの完成、阿羅漢になることが目的で、それが一生続くとすれば、内面の完成のみを考えて、周りの発展、環境、社会をどうするとか、考える余裕がなかったのではないか」と質問されると、「阿羅漢について、タイでは今議論されている。阿羅漢というより菩薩という精神ゴールが、他人を助けるとか、社会を良くするのではないか、という議論がタイで起こっている。上座部仏教では、菩薩的な行動ができる人は、お釈迦さんだけと信じている。みんなができるということでない。私たちがそれをできるという考えは上座部経典には書いていない。大乗仏教を取り入れるという動きは、トップ層ではなく、また大学と関係ある僧侶たちや学者に限られている。特に、現代教育がその役割を果たすのではないかと思っている。」と答えている。

日本仏教での妻帯については、「日本にきて驚いたのは、お坊さんが結婚して子供を生み、お酒も飲むのに、日本人がそのようなお坊さんを尊敬していること。酒を飲み、肉を食べても、尊敬されているのは、何かいいことをしているのではないかと思った。日本の仏教は、僧侶の結婚を最初から許していたと思っていたが、いろいろ調べてみると、そうでなく、妻帯は明治以後だということを知った。勉強する価値があると思う。今後、日本の仏教の歴史を研究テーマにしたい」と感想を語る。

他の宗教との対応については、「タイでは、仏教、キリスト教、イスラム教の人たちは、別々に住み、働いているので、互いにコンタクトし

ないが、むしろキリスト教やイスラム教の方が仏教より閉鎖的なのではないか」と、温和な中に厳しい目ものぞかせた。バナルジ博士の話から、タイも激変の時を迎えていることがうかがえる。

（宗教新聞より転載）